

関西学院創立125周年記念シンポジウム



関西学院

関西学院は2014年に、創立125周年を迎える。神戸の地で発祥し、西宮市、三田市などに幼稚園から大学院までを展開する。近年特に力を入れている取り組みが「マスター・フォア・サービス」を体現する世界市民の輩出に向けた国際的なプロジェクトの推進だ。創立125周年記念シンポジウムでは「神戸から世界へ 地域と歩む学び」をテーマに、開学の2人の卒業生と井上琢智学長が、世界市民を育てていくための課題と期待について意見を交わした。

125
関西学院
1889-2014

神戸とともに 世界へ羽ばたく

大志を抱く人の育成へ

神戸は幕末の条約によって開港場となり、世界に開かれた港町としての役割を果たすとともに、外国人によって多くの文化が持ち込まれた。創立者のランバス先生は世界を渡り歩いた宣教師であり、日本の中で暮らした神戸を教育の場に選び、居留地に拠点を構えた。その後、原田の森に移った。原田の森では神学部、チャペル、文学部、中央講堂、中学校のほか、高等商業学校の校舎もあった。キャンパスの中に住宅があり、生徒は宣教師とともに外国文化に触れた。1912年には4代目の院長、ベーツ氏がマスター・フォア・サービスというスクール・モットーを唱え、講堂は市民のさまざまな催しの場となり、運動会は市民が観客に集まる場でもあった。その後、文部省から大学令が公布されたことを受け、大学設立を目指したが資金の捻出ができなかった。その時に大きな役割を果たしたのが阪

基調講演 関西学院大学学長 井上 琢智氏



急電鉄の小林一三氏だ。関西学院は小林氏の尽力で原田の森の校地を売却し、その資金をもとに西宮・上ヶ原の校地を購入した。大学設立を目指して上ヶ原に移ったのは1929年。構想・設計を担当したウォリス氏は甲山を前にして右側に人文系の学部を、左側に社会科学系の学部を配置し、時計台前の中央芝生を両方の分野の学生が学問を論じる場として整備した。1995年には総合政策学部を新しく整備した神戸三田にキャンパスを設立した。「マスター・フォア・サービス」は「奉仕のための練習」だ。海外の大学約150校と提携し、正規留学生が6

00人に加え、プログラムの参加者も900人に増加。また、国連ユースボランティアなどに多くの学生が参加するなど、自らのスキルを高めた地域に役立つ仕組みを作っている。また、実践型世界市民の育成のため、現在大きな計画が二つ進んでいる。その一つが文部科学省の「グローバル人材育成推進事業(全学推進型)」に採択された「実践型世界市民育成プログラム」だ。複数分野専攻など学部間の垣根の低い教育体制、海外の大学や国際機関との協定、学術交流、多彩な留学プログラムの提供、国際ボランティア活動などを通じ、実践型の世界市民を育成する。もう一つは「クロス・カルチャル・カレッジ」だ。カナダの大学3校の学生がカナダと日本で、寝泊まりをしながら混成の実践的科目を学んでいる。関学がかつて商経学部をつくって神戸神戸の求める人材を輩出したように、いま再び新しいプログラムでさらに世界市民を送り出していき

関西学院院長 ルース・M・グルーベル氏 美しい街並み 関学の原点



関西学院は1889年9月28日の創立で、今年9月28日で丸124年を迎えた。創立後間もなく、神戸市灘区の原田の森にキャンパスを設けた。いつも六甲山が生活の中に溶け込むような存在で、当時は海を見渡すこともできた。美しい山、広い海を前にして毎日過ごしていた学生や教職員は、その風景が生産を通して頭に残り、生活の励みになったと思う。そして、地域の人たちや組織からも一人一人が励まされ、人生に大きな影響をいただいた。現在、キャンパスの拠点は西宮、三田に移ったが、世界に一つしかない美しい街、神戸がなければ今の関西学院はない。世界に開いている神戸、世界を視野に置く関西学院はびつたりのパートナーだった。これからも関学は神戸とともに世界を視野に入れて活動を続け、地域と世界を作っていく。

■パネルディスカッション参加者■

- パネリスト
関西学院大学学長 井上 琢智氏
- 野球解説者 田口 壮氏
- 「アッシュ・シー・クレア シオン」(現・シユゼット) 代表取締役社長 蟻田 剛毅氏
- コーディネーター
神戸新聞編集委員 磯辺 康子



現代の若者像

主体的に学ぶ意欲が必要 井上氏

磯辺 大学教育の主役であり、日本の未来を担う若者について知り、地域との共生・貢献について考え、それらを生かした教育とは何かを議論していきたい。まず、現代の若者像についてうかがいたい。

井上 今の学生は非常によく勉強するし、驚くほど出席率が高い。だが、中学、高校と同じように時間通りに来て、授業を受けている印象だ。「勉強」が強いられるものだとすれば「学ぶ」は主体的なもの。残念ながらその区別ができていない。授業が自分の問題を探すための場だと思えるようになれば「勉強」から「学ぶ」に転換できる。主体的な活動の中で「学び」をしていくということを、若者にぜひ取り戻していただきたい。

田口 今の学生は小さい時からパソコンを触り、いろいろな情報と知識を幅広く自分の中に取り込むことができる。合理的だしシミュレーションは

まい。若い者は、と悪いことを言われがちだが、いいところもある。

磯辺 今の若い世代は、われわれのころに比べると大変な時代に生きている。いろいろな国の人とコミュニケーションをとらないといけないし、自己プレゼン能力がないと生きていけない時代。ネット上のコミュニケーションは上手なのでそれを生かしてダイナミックなコミュニケーションを期待したい。



井上琢智氏

はどう考えているのか。

磯辺 海外展開はまだ準備の段階だ。ただ、定期的に若手をフランスに修業に行かせている。口下手だったある男性社員が修業から帰ってきたら、お客さまを堂々と案内できるように変化していた。さまざまな国の人と修業する中で、アピールしないと仕事を回してもらえないことを痛感したようだ。学生には関学のプログラムを使って、自分の価値を自覚して人に伝えていける人材になってほしい。

磯辺 2人の話を聞いて教育機関としてどうすべきか。

井上 学生にも主体的な学びがないとすると、その理由は夢がないからではないか。あまりに満たされていて「こうなり

地域との共生、地域貢献へ

住民とふれあう場が大事 蟻田氏 町への感謝と愛着持とう 田口氏

磯辺 地域との共生、地域貢献も重要だ。阪神・淡路大震災や東日本大震災でも「地域」はクローズアップされた。

蟻田 私自身、海外に留学して、自分の住むところが大事な



田口壮氏

たい」という自分を持っていないのかもしれない。渴望感があれば、それを満たすためにどんな行動をしなければいけないかというプロセスが出てくる。関学の教育では、一人一人が自分のやりたいことをサポートしている。例えば、神戸三田キャンパスのアカデミックコモンズは学生自らが学ぶ場として設けられている。グループ学習の場を広げて、自分に欠けているものを見つける努力をしてほしい。

着のみ着のまままで応援に駆け付けてくれるなど、われわれが逆にファンの皆さんから勇気ももらっていた。翌年には日本一にもなった。人の願いの強さ、信じる強さは必ず力になることを実感した。私は関西の地域性があるものは自分たちの町に対する愛着と感謝の気持ちだ。

磯辺 大リーグのチームは地域を大事にしているとも聞く。

田口 シーズン中にもかかわらず病院で難病の子どもたちと遊んだり、チャリティーゴルフに出場したり、マラソンのゴールテープで花を渡したりということが見事に行われている。地域のありがたさを分かっているからだ。

磯辺 関学は震災ボランティアに熱心に取り組んでいる。地域貢献について大学が果たす役割は。

井上 関東大震災の時にもボランティアを送った歴史がある。人はみな平等であり、苦しい時には助け合うという理解が根本にある。こういうことをしてほしいと思うことを相手にしてあげる。地理的な意味での地域ではなく、心と心が共感できる範囲が地域だ。そうすると世界が一つになれる。

磯辺 大学、関学への期待についてうかがいたい。

蟻田 関学のことを臆面もなく好きだと言える人が生まれる大学であってほしい。私の会社も業績が厳しい時があったが、会社が大好きという愛があった



蟻田剛毅氏

からこそ頑張れた。自分に自信を持ってアピールするところから地域との共生が生まれ、世界の関心と呼び、真の世界市民になれる。

田口 今年、関学のOB会に入って、何度か参加して感じたことは、関学は横と縦のつながりが強く、私はこういう人たちに支えられていたんだということが実感できた。これからは「関学愛」をもっと前面に押し出してほしい。

井上 4代目院長のベーツ先生は、個人が神から与えられた賜物を引き出すのが教育だと言った。それが結果的に世界平和を導くことになる。関学は豊かな個性を導くための教育の場を作る。そのためにも本人の志が一番重要だということをおたためて強調しておきたい。

磯辺 一人の参加者として楽しませていただいた。このシンポジウムが来年125周年を迎える大学の将来像、役割、地域との共生を考えていく第一歩になればいいと思う。

世界を舞台に活躍するには

積極的に自己主張しよう 田口氏

磯辺 若者が世界に目を向けることは重要だ。田口さんが米大リーグでの経験をもとに伝えられることがあるとすれば、

田口 大リーグは上下関係が厳しい世界だが、その中でも自分を積極的にアピールしていかないといけない。何も言わなくても分かってくれるだろう、というような日本人の感覚では使ってもらえない。私はマイナー

時代の2年間、毎日監督室に通い「俺は準備できているから試合に出せ」と言った。それでプレータイムが増えていった。勇気を持ってしゃべることが大事だ。初めはつらいし、恥ずかしいが、失敗しながら分かるようになっていく。

磯辺 蟻田さんはスイス激戦区の神戸・阪神間で確固たる地位を築かれている。海外展開